



この「時計台対話集会」も、京都大学の森里海連環学という言葉のもとに、第四回を迎えることとなりました。たくさんの方々にご協力いただき、またご出席いただきましてありがとうございます。主催する京都大学のフィールド科学教育研究センター、それから共催する21世紀COEプログラムである「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」、これは京都大学の得意とする分野の中でもひととき特徴を発揮している教育研究の分野です。それに京都府教育委員会、京都市教育委員会のご後援をいただくことで、また特別協賛として株式会社村田製作所、協賛の京都・まいづる立命館地域創造機構、NPO法人エコロジー・カフェ、全日本空輸株式会社、サイファーアソシエーツ株式会社、それから株式会社大伸社はじめ、たくさんの方々にご協力いただいています。ありがとうございます。

基調講演「虫から見える『森里海』連環」の養老孟司先生、どうもありがとうございます。多くの方々にご出演いただきますが、今日はムラタセイサク君も特別出演と聞きましたが、そうですか。どうもありがとうございます。

今日のテーマは「むし」だそうで、今日出られる方は皆さん虫が好きということですが、私も大好きで、学生のころは上賀茂の山の上に住んでいて、白い幕を張つて一晩の間に現れる虫を全部観

察するということを勝手にやっていました。あとで聞くと、それが生態学の基本であると専門家がおっしゃるので、なかなか捨てたものではないなと思っておりますが、楽しかった思い出として心に残っております。

このフィールド科学教育研究センターですが、初代の田中先生が理念を明確にされました。日本の自然は森、沿岸海洋、里、その生態系によって構成されていて、それらは相互につながっていると考える、ということ。別々に生態系を研究しているのではなくて、複合的な自然生態系と人との共存システムの説明が目的であるということで、このセンターが設立されたわけです。森里海連環学という新しい学問領域を生み出したということは、私どもの誇りでもあります。

皆さんも、毎年来てくださっている方は覚えておられるでしょう。宮城県の畠山さんのカキの養殖の現場には、その後全国から学生たちが、特に京都大学の学生たちが訪れて、実習に参加しています。また、ニコルさんの黒姫山のみもとでは少人数セミナーが開かれたり、それから仁淀川では、地元の方の協力でこれも実習が行われているなど、若い学生たちの教育の現場になっています。

この森里海連環学の創設から五年になります。関係者の皆さんの努力で、この分野が全国の共同利用の教育研究施設として機能を備えてきました。さらに大きく発展していく時期に差し掛かっていると思います。今日はさまざまの分野の研究者の方にご議論をいただくわけですが、それがまた発展を支えていくきっかけになってくれればと祈っています。たくさんの方々に参加していただいて本当にありがとうございます。よろしくお願いします。